

ずいそう

アルジェリア高速道路工事

刈谷 健彦



♪ここは地の果てアルジェリア、どうせカスバの夜に咲く〜♪

アルジェリアはアフリカである。サハラ砂漠というイメージがあろうが決して砂漠ばかりではない。瀬戸内海を思い浮かべてもらおう。海を挟んで北側には広島、岡山県などがあり南側には愛媛、香川県が並んでいる。地中海を挟んでフランスを広島とすればアルジェリアは愛媛なのだ。葡萄、柑橘類などの果物もよく採れる。国土面積は日本の6.4倍で3,300万人が住み、その人種構成はアラブ人80%、ベルベル人19%となっている。首都のアルジェは、金沢、宇都宮とほぼ同緯度である。

今年7月、施工開始間もないアルジェリア東西高速道路工事を見てきたので、その感想をつづってみる。

同工事はアルジェリア北部を、東のチュニジア国から西のモロッコ国まで、ほぼ東西に横断する計画だ。そのうちの東部の399kmの建設工事を昨年同国と鹿島・大成・西松・ハザマJVとが契約した。上下合わせて6車線、工種は重機土工主体でトンネル、橋梁、舗装などもある。例えて言えば、東京から名古屋を過ぎ岐阜までの東名・名神高速道路を4年足らずで完成させるという、超大規模突貫工事で、日本では絶対にありえない。調査、測量や基地となる事務所・宿舎建設工事、道路盛土や砕石製造設備工事(骨材プラント)、コンクリート製造設備工事(生コンプラント)などの工事が行われていた。JVには、日本人職員190人を含む1,300人強のメンバーが従事し、まだまだ増えるとのことであった。

私の目的は大きく二つあった。一つ目は重機土工体制を始め骨材プラント、生コンプラントなど機電部門が大きく関与している工事がうまく立ち上がっているか？二つ目は日本から派遣した鹿島の機電社員10名への激励で、私としてはこちらの目的が大きかった。

JVの組織は総合事務所(HQ)の下に7ヶ所の工事事務所(キャンプ)があり、キャンプはJV構成会社がそれぞれ分担している。そのうちのアルジェと古都コンスタンチンにあるHQと鹿島主導のキャンプ2,4,7の合計5ヶ所を訪問した。

社員の業務は国内工事よりも広範囲であり、上は計

画・設計・折衝、下は作業員への技能指導までである。例えば、国内では電話で生コンが現場に届くが、彼の地ではそうはいかない。生コンの材料である砂、砕石は原石山で製造し、水は井戸を掘り、更にセメントは適合品を調達して、それらを現場で練り混ぜる。各種プラントは中国、タイ、マレーシア、フランスほか世界各地から調達するが、不良品や輸送中のトラブルも少なくない。現地での手直しを具体的に指導するのも機電社員の役割だ。国、地域によって慣習、やり方が違い、国内方式は通用しない。また言葉も大きな壁になる。業務ではフランス語が主流だが、アラビア語しかわからない人もいる。

工事範囲が広いので現場間の移動も大変だし、場所によってはゲリラの出没で治安が悪い。したがって、県をまたぐ移動には「ジャンダルメリー」と称する兵隊の護衛車をつけるのが基本ルールだ。しかしその運転スピードは速く、荒っぽい。社員には保安上、車の運転は許可されず、現地の運転手をつけている。

そのほかにも不便なことが多々ある。アルジェリアと日本間の情報通信がままならない。現在、メールは不通がちだし、電話もつながりにくい。アルジェリア国内間でも不便なようだ。また、輸入に時間や手間がかかりすぎるのも工事の進捗に障害となっている。

社員の行動は大きく制限される。基本的にはキャンプは塙で囲まれており、その外は安全とはいえない。休日も外出がままならないので、ストレスはたまるだろう。食事はイスラム圏なので豚肉はないが、キャンプの食事は工夫され、邦人コックがいるところもある。飲酒は、ごく一部のレストランと宿舎内ではOKだ。家族帯同はだめで、年に2~4回帰国しているのが実情だ。

このような不便で厳しい環境でも、スケールの大きなプロジェクトに携わることができ、機電社員は使命感を持って頑張っていた。日本にいる我々は、今後とも現地で活躍する社員を支えていかななくてはならないと改めて強く感じているところだ。

——かりや たけひこ 鹿島建設(株) 機械部長——